

◎自由発表（第3会場）【座長・司会】胡田 裕教（関西地区研究会常任幹事）

【演 題 等】「発達支持的生徒指導の実現に向けた特別活動の可能性に関する研究構想について」

【講演・発表者】芦屋市教育委員会学校支援課 主査 池原 征紀
芦屋市立潮見中学校 教諭 小林 則好

・発表概要

本市の中学生は、全国学力・学習状況調査において学力面では良好な結果を示しているが、主体的に問いを立て、深い学びにつなげるような教育的営みに課題がある事が示唆される。

生徒が話し合いを通じて、意思決定を行う機会を設け、段階的に活動の主導権を委ね、自分たちが学校という社会の作り手であるという意識を持つことを目指したり、各学年の生徒指導担当が職員室内において意図的に職員間の対話を促す働きかけを行うことで、実践と省察が連動する体制づくりを進めることで、教員間での生徒指導観の共有と対話を促進し、職員室における心理的安全性と同僚性の醸成をめざしたりする。

こうした取組を通して、特別活動が発達支持的生徒指導の実践の場となりうる可能性を明らかにしたい。

・発表要旨

(1) ONE STEPpers

本市の生徒は、学力は高いが主体的・自律的に学ぶことや、自分たちが学校を作っていくという点に関して意欲が低いと捉えている。これに向けて、教育委員会としてこれまでは研究指定校を設け研究していたが、それをなくし、自主参加制の研究チームを立ち上げた。市教委の指導主事が事務的なサポートをすべて行っている。学習方法としては、昨年度までは自由進度学習やPBLが多く、小学校における取り組みが中心であった。今年度から学校づくりや特別活動、そして生徒指導的な視点も入れていく。

(2) 委員会活動を通じた、生徒の意思決定の機会と責任の段階的譲渡

生徒指導担当が生徒会執行部の話し合いに参加し、学校づくりの仕組みを変えるためのきっかけづくりを行っている。代表委員会を2学期スタート時に臨時で開き、クラスの中で学校の問題点や困っていることを話し合い、代表委員会がそれを聞き取ってまとめ、生徒会執行部で活動内容を検討し、再度話し合って決定していくというプロセスを提案した。再度、生徒会活動とはどのようなものか、その見直しをしていこうとしている。

(3) 教員間の対話を通じて生徒指導観を共有することによる組織的な生徒支援体制の構築

教員の全体研修を行い、「学校とは何か」「学校でできることは何か」というテーマでグループに分かれて話し合いを行った。その中で、「繋がりを構築する場所」「対話を通して信頼関係を築き、安心感を得られる場所」「失敗を経験することで成長できる場所」といった意見があった。これらを受けて、生徒指導部でまとめ、生徒と生徒、教員と生徒、教員と教員が、お互いに多様性を認め合い、自分らしさを発揮し、表現できる場所が学校の役割であるという結論に至った。

(4) 期待される成果と意義

委員会活動における生徒の発言・提案の頻度、行動変容を観察し、質的に分析する。また、すでに学期に一度ずつ行っているScTN（社会的スキル評価尺度）などを用いて、生徒の社会性や主体性に関する定性的・定量的な変化を測定する。さらに、教員の対話の内容や頻度、生徒指導に対する価値観の共有や議論の内容などについても記録する。こうした取組を通して、特別活動が発達支持的生徒指導の実践の場となりうる可能性を明らかにする。

・質疑応答の概要

- Q1 中学校の生徒会担当の先生方が集まって協議したり、生徒会執行部の他校の生徒同士が集まって話したりするような取り組みはどうか。
- A1 芦屋市の中学校3校の生徒会担当の教員と執行部の生徒たちが一つの中学校に集まって協議をする機会があった。その中で「何々チェックをする」といった活動や、特定のウィークに向けて掃除を強化するといった、チェックばかりの活動になっているということが共有された。もっと自分たちで学校を変える、みんなが安心できる場を作るということを目指していきたい、という意見が、生徒会執行部の生徒たちの中からも出てきた。
- Q2 子どもたちに委ね、自分たちの学校づくりに関わってもらおうということを、先生方が覚悟を持って受け入れられるかという点で非常に困り感を持っている。もし、この発表の中学校の先生方が皆そのような意識を持たれているのであれば、それは素晴らしいことだと思うが、何か先生方へ向けた仕掛けや働きかけがあれば教えてほしい。
- A2 4月当初に「学校とは何か」というテーマで先生方に話し合ってもらった際に、生徒指導部と管理職で、「繋がり」や「生徒の主体性」といったキーワードが出るだろうと予想し、「これを大事にしましょう、特に我々が力を入れるべきは特別活動ではないか」という方向性を示唆した。4、5、6月と、特に教頭や校長と話し合いながら、じわじわと浸透させていくという形をとっている。また、若手の教員が増えているので、こちらから「どうだった?」「あの件はどうなった?」と気軽に話しかけ、繋がりを作っていくきっかけを狙って行っている。

